講演 I

社会性の起源を探る
― 乳幼児研究から見えてくるもの

開　一夫（東京大学教授）

電車の中の光景が一変した。7人掛けの長シートに座っている乗客のうち4人はスマートフォンか携帯電話を眺めている。子連れの母親は、タブレット端末を巧みに操る小さな我が子を笑顔で見ている。隣に座っている初老の男性はその様子を訝しげに見つめている。情報コミュニケーション技術 (ICT) のめざましい発展と、それに付随した情報機器のめまぐるしい開発は、我々の生活スタイルを劇的に変化させた。新たな情報機器の出現は、大人の生活環境を変化させただけでなく , 小さな子どもの発育環境にも影響を与えている。こうした機器と接触することは、リアルなコミュニケーション機会を奪ってしまうのか？ 幼少期におけるメディア (機器) との接触は、「ひきこもり」や「いじめ」といった問題行動の原因となるのか？ そもそもリアルなコミュニケーションとは何なのか？

講演前半では、我々が社会的相互作用の基盤メカニズムを明らかにすることを目標として行っている発達認知科学的研究について紹介する。具体的には、「今性 (newness)」と「応答性 (responsiveness)」に着目して乳幼児を対象にして行っているいくつかの実験研究について述べることにする。こうした基礎的研究は質的にも量的にもまだまだ十分とは言えないが、小さな子どもを取りまく情報コミュニケーション技術をより良い方向に向けるためには必須であろう。講演後半では、ここ数年我々が取り組んでいる「教え・教えられる」人工物（ペダゴジカル・マシン）開発ための研究手法についても紹介したい。

〈プロフィール〉
富山県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻教授。日本赤ちゃん学会常任理事。日本こども学会常任理事。日本学術会議連携会員。主な著書・編書に『母性と社会性の起源』（岩波講座：コミュニケーションの認知科学３巻）、『赤ちゃんの不思議』（岩波書店）、『日曜ピアジェ 赤ちゃん学のすすめ』（岩波書店）、『ソーシャルブレインズ - 自己と他者を認知する脳』（東大出版）など。

座長

渡辺富夫（岡山県立大学情報工学部教授）

1983年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。工学博士。同年山形大学工学部情報工学科助手、1984年同専任講師、1989年同助教授、1992年 -1993年 米国ブラウン大学客員研究員、1993年岡山県立大学情報工学部情報システム工学科教授。理事（産学官連携担当）、地域共同研究機構長。IEEE RO-MAN, Best Paper Award、ヒューマンインタフェース学会論文賞、日本機械学会設計工学・システム部門業績賞等受賞。日本機械学会フェロー、ヒューマンインタフェース学会監事（元会長）、日本子ども学会常任理事等。